2012年3月1日

セミナー通信　Ｖｏｌ．２０２　西村セミナールーム

主宰　西村　恵子

# 新年度中学校新課程にむけて

いよいよ新年度が始まりました。ご承知の方も多いと思われますが、中学校では今年度から教科書が大幅に刷新されます。小学校は昨年度でした。これは、日本の学校教育の拠りどころとなる学習指導要領が２００８年に改訂されたことに伴うものです。各教科の教科書の平均ページ数は、いわゆる「ゆとり教育」が全面的に取り入れられた２００２年度使用の教科書と比べると、約１．５倍になります。中でも数学は６３％増、理科にいたっては７７％増、英単語数など従来の９００語から１２００語へと大幅アップです。

では、塾としてはそれにどのように対処していくのかということですが、主要指導教科である英数の指導をおろそかにすることはできないため、今理社国にとっている時間を必要分だけ英数に回さざるを得なくなります。では、理社国はどうするのか。通塾時間数を増やし、指導時間を確保するのか。残念ながらこれは当塾の場合カリキュラム上不可能です。また、もし可能であったとしても私はやりたくありません。その理由としましては、ここ２，３年感じているジレンマ“教えれば教えるほど子どもは自力学習の力をなくしていく。やらせればやらせるほど指示を待ち、受け身の勉強になっていく”というものがあげられます。

最近の塾生を見ていると、成績が上位の子であっても、自らすすんで宿題以上の勉強に取り組むということは滅多にありません。やらないからやらせる、やらされるから余分なことはさらにやらなくなる、という悪循環がここに生まれています。これでは十分に伸びません。

１９年前に塾を始めた当初は、このような悩みはありませんでした。指導要領も「ゆとり」ではもちろんなく、週３回を全て英数の指導に使っていました。理社国は自分で勉強するもの、と塾生にも認識させ、定期テスト前に少し対策をやってあげる程度でした。それでも当時の塾生は英数の成績が伸びてくると、自然と理社国にも力を入れ、徐々にその成績も伸ばしていきました。ここには好循環がありました。

今、昔と同じやり方に戻したとしても絶対にうまくいきません。そもそも子どもたちが理社国をやらなくなってきたから８年前より授業にも組み入れたといういきさつがあります。しかし、悪循環を断ち、自主的に勉強を進められるように導きたい。そこで、今年は思い切って理社国は完全に自宅で予習をさせてみようと考えました。もちろん、自力で予習が可能な教材を使ってもらいます。1 週間という期限の中、自分の都合に合わせて進めさせ、わからなかったところをピックアップさせておき、塾でそのフォローと理解度確認をいたします。

自主性は、それに“任せる”のではなく“育てる”もの。今年はしっかり育てていきます。